

●優秀賞

地方の「まちづくり人」を 育てる試み

～生徒に、事業を企画・実践する力と
地域への愛着を育む～

岐阜県中津川市立苗木中学校 かとうもとや 加藤源也



1 はじめに

(1) 苗木という地域

中津川市は、海のない岐阜県の南東の端に位置しており、本校がある苗木地区は、その市街地の木曾川をはさんで北側に山林・農地・住宅地が広がる、小中学校が一つずつある静かな地域である。学校は、生徒数167名、7学級の中規模校である。

苗木地域は、江戸時代、小さく貧しいながらも、遠山家が治める「苗木藩」という一つの藩であった。そのせいか、人と人のつながりが強く、自分たちのまちのことは、自分たちで何とかしようとする気風がある。最近、「苗木城址」が観光資源として脚光を浴びるようになると、地元のPRに有志グループが立ち上がり、盛り上げようと活動をしている。〔「城山レディース」「城山を愛する会」他〕



(2) 学校の役割

「学校の役割」は、二つあると考えている。

一つは、子どもの「知徳体」を育むこと。全ての学校の教育目標に言葉を変えて織り込まれ、学校経営の根幹となっている。

もう一つは、「その地域に対する学校の役割」があると考えている。

全国的な少子高齢化の波が、この地域にも少しずつ押し寄せており、中津川市も地域の活性化、子育て支援、住みよいまちづくりなどに力を入れて取り組んでいる。

この状況に対して、苗木地区では、区長会をはじめとする地域住民が危機感を抱いており、地域の課題を自分たちで何とかしようと、地域活性化のために動き始めている。

平成29年2月、苗木地区まちづくり推進協議会が住民対象の講演会を開催した。「人と組織と地球のための国際研究所」代表、川北秀氏による「自治を回復し、まちの課題をまちの力で解決するために」という講演で、中学校にも案内が来たので職員3名と生徒4名が参加した。

講演で印象に残った地域活性化のキーワードは「行事より事業」「人交密度を高める」であった。

本校の生徒は、これまで地域の「行事」にソーランの踊り手として、また、運営ボランティアとして数多く参加してきた。地域の一員として活動することを通して、地域を盛り上げる手伝いをしてきたのである。

いわば、既にあるものに参加する形で地域貢

献をしようとしてきたが、この講演を通して、学校が主体となり、教育として地域貢献「事業」を行う形もあるのではないかと考えるようになった。

地域貢献「事業」を行うことを通して、

A 地域貢献できる力と自信をつける。

B 地域に対する愛着をもつ。

子どもたちは将来、地元に残って頑張る者、よその土地へ行く者等、それぞれの道を歩んでいこう。地元で愛着をもって地元で活躍する者、地域社会の中で自己実現しようとする者、よその土地からでも自分の生まれ故郷を思う者を増やしていくことが、苗木中学校の二つ目の役割であると考えている。

自分たちの地域を自分たちの手で盛り上げようとする気概がある苗木地区の、遠くない将来の担い手を育てること。これが、地域に対する本校の大きな役割であると考えている。

2 将来の「まちづくり人」を育てる総合的な学習の時間の構想

前述のAとBの力は、生徒の発想で地域貢献のための活動を企画し、実際に実行していくことで育つと考える。地域貢献をめざす活動を通して、地域貢献する力と気持ち（地域愛）を育みたい。

本校の2年生は、毎年愛知県篠島にて2泊3日の宿泊研修を行っている。当初学年主任は、生徒たちに海の体験と共に、山国苗木を民宿の人に紹介する活動を計画していた。学年主任に、地域貢献という視点で、苗木の紹介活動を、苗木の観光PR活動に広げて、（総合的な学習の時間の）指導計画を立ててはどうかと提案した。今地元が推し進めている「苗木城址」を中核とした観光プロジェクトを、中学生の視点で発想し推し進めてみようとするチャレンジである。

学年主任と相談を重ね、次のような考え方で、地域貢献「事業」を、総合的な学習として行うことにした。

〈指導方針〉

・生徒の発想で、大人の世界に働きかけることを通して、企画力・実行力をつけさせる。

・成功させて自信をもたせ、失敗させて社会の仕組みやたくましさを学ばせる。

この学習をきっかけとして、総合的な学習の目標である「…主体的に…よりよく問題を解決する資質や能力を育成する…自己の生き方を考えることができるようにする」に迫っていけると考えている。

かくして、

テーマ 地元苗木に貢献しよう

事業名 苗木に観光客を呼び込もう大作戦

という、地域貢献「事業」を、総合的な学習の時間を使ってスタートさせた。

3 「苗木に観光客を呼び込もう大作戦」

(1) 生徒の発想による企画

最初に、2年生学年集会を開催した。

- ・2月の講演会に出席した生徒による苗木地域の課題の話
- ・学年主任による地域貢献の提案
- ・学年執行部による、篠島研修で観光PR活動を行う提案

がなされ、「苗木に観光客を呼び込むために、篠島研修のどの場面でどんなことをすればよいか」を考え、活動を企画、実行していくことを確認し合った。

学年集会を受け、学年執行部会、学級会を重ね、少しずつ活動を具体化していった。（学年の教師も生徒と一緒に考えていった。）

〈活動計画〉

○自分たちが苗木のことや魅力が分かっていないと、苗木の良さは伝わらない。苗木の学習をしていく必要がある。問題集を作成して勉強し、全員検定合格して篠島研修に臨む。

○働きかける対象・方法

「民宿の方」…民宿の方に観光PRの味方になってもらうために、郷土料理「五平餅」を振る舞いながら、苗木の魅力を語る。苗木のポスターやパンフレットを置いてもらう依頼をする。

「篠島島民」…島でソーラン（踊り）ライブを行って島民に集まっていたき、ライブ終了後、パンフレットなどを利用して、島民に対して観光PR活動をする。

「観光客」……多くの観光客が集まる場所で、観光PR活動を行う。年間取り組んでいる合唱で観光客を集める。

「一般」…生徒の手による「苗木城址PR動画」を作成し、学校のホームページ、YOUTUBEにアップする。

○本物の活動でないと、人の心を引きつけることができない。（気持ちを込めた準備）

- ・魅せるソーランに仕上げる。
- ・歌い込み、聴かせる合唱に仕上げる。
- ・美味しい「五平餅」をつくれるようになる。
- ・自分たちで観光パンフレットを作成する。

(2) 校長の役割

〈指導方針〉のところで述べたように、生徒自らが、自分たちの企画を大人の世界に働かかけることを通して学ばせたいという願いから、校長として、学習を進める上で生徒たちが訪れそうな所へ事前に伺い、この「事業」のねらいを説明し、生徒の相談や交渉に対応していただけるよう、お願いして回った。

- ・市役所観光課 ・市役所苗木事務所長
- ・市役所広報広聴課（動画）
- ・地元の印刷会社
- ・地域の特産物を売る店
- ・苗木地域まちづくり推進協議会
- ・苗木遠山史料館館長 等

多くみなさんに賛同していただき、協力の約束を取りつけることができた。

(3) 思いを伝えるための準備

6月の篠島研修に向けて、生徒はプロジェクトチームに分かれ、4月後半から準備を進めていった。生徒に企画する力をつけたいと願い、自分たちのアイデアを人に分かってもらうための「企画書」を作成する指導も行った。

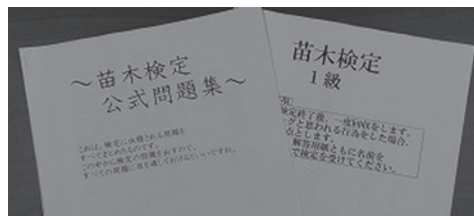
① 「苗木検定」プロジェクト

自分が地元のことや魅力が分かっていなければ人にPRすることはできないと考え、苗木城・苗木の歴史を中心に地元のことについて全員で勉強した。

問題づくりは、担当生徒が苗木城や隣接する苗木遠山史料館を実地調査したり、パンフレットや図書館の資料を調べたりしながら行った。また、問題の記述や内容の添削、問題の難易度や重要度の判断など、苗木遠山史料館館長さんをお願いした。このようにして、地元を学習するための問題集を完成させ、家庭学習等で学習した。

次に、難易度の高いほうから1級・2級・3級の検定問題をつくり、総合的な学習の時間の一部を使って検定試験を行った。最終的に、全員いずれかの級に合格して篠島研修に臨んだ。

（1級18名・2級12名・3級11名）



- ①苗木にある踊りの名前をなんと言うか。
- ②苗木城の壁の色は何か。
- ③1石はいくらか。
- ④苗木城の壁の色は何か。
- ⑤苗木城に行くまでの門の数はいくつあるか。
- ⑥苗木城を建てた人物は誰か。
- ⑦苗木城には3つの呼び名があります。その名を
- ⑧遠山史料館は中学生無料か有料か。
- ⑨苗木城の三の丸の出入口にあった門は。

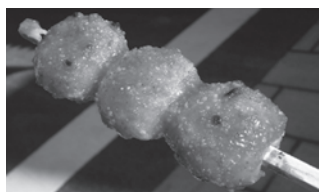
② 「五平餅」プロジェクト

民宿の方に、苗木のポスターを貼ってもらったり、パンフレットを置いてもらったりするお

願いをするときに、郷土料理の五平餅をごちそうして「自分たちの味方になってもらおう」と、全員五平餅づくりをマスターした。

総合の時間に、生徒が調べてきたレシピで担当生徒がつくってみたが、「まずい」ものになってしまった。そこで、担当が学校の近くの五平餅屋さんへ聞きに行くと、女将さんに「学校へ教えに行っておけるよ」と言っていただき、思わぬ展開となった。家庭科室で、五平餅のプロにこつを教えてもらい、担当生徒たちは人に食べてもらえる五平餅をつくることのできるようになっていった。

担当生徒たちが講師となって、学年全員で五平餅づくりの練習をして研修に臨んだ。



③「観光パンフレット作成」プロジェクト

苗木について学んだことを生かして、生徒たちの手で観光パンフレットを作成した。

総合的な学習の時間に、地元の印刷会社の方に来校していただき、担当の生徒たちがパンフレットづくりについて相談した。どんな過程でパンフレットはできるのか。どんなつくり方をすると、どれくらいの費用がかかるのか。納品希望日の何日前までに原稿を完成させればよいのか。自分たちはいつまでに、どの段階までやらなければならないのか等、生徒たちは真剣に説明を聴き、考え、質問していた。目的がはっきり分かっているのか、生徒たちの相談も当

得たものだった。印刷会社の方には、「(生徒たちの)話がなかなかまとまっていた」と言っていた。最終的に、400部作成してもらう契約をした。



④「ポスター・パンフ入手」プロジェクト

「PR活動をより効果的にするために、苗木城の大きなポスターが欲しい」「たくさんの人に苗木を知ってもらうために、もっとたくさんパンフレットが欲しい」、そんな願いをもち、担当の生徒が中津川市観光課にアポを取り、企画書を持って相談に出向いた。

生徒たちは、苗木地区担当の職員の方に、企画書を使いながら自分たちの企画を説明し、全面的に協力していただけるという回答を得た。苗木観光に関わる次のものを、苗木中学校生徒に託していただいた。

- ・ポスター 4 種類…計20部
- ・パンフレット 4 種類…計500部
- ・クリアファイル・ポストカード等…約200部
- ・苗木城の布絵 (のぼり)…一つ

⑤「観光動画」プロジェクト

一般にも、苗木城について広くPRするために動画配信しようという発想で、このプロジェクトは始まった。まず、学校のホームページを管理する市役所広報広聴課に、担当生徒が企画書を持参して相談に出向いた。



企画書を見せながら、生徒たちの願いを担当の方に話すと、製作する苗木PR動画を苗木中ホームページに掲載していただく了解を得るとともに、動画制作上の注意事項を教えていただいた。

また、苗木地域まちづくり推進協議会のホームページにも、作成した動画を掲載してもらうよう依頼し承諾を得た。

この活動は、生徒たちにとって大変勉強になった。というのは、動画作成が遅れ、苗木地域まちづくり推進協議会に約束した期限までに動画を届けることができなかったのも、担当生徒が大変叱られたのである。生徒たちは、改めて期限を守ることの大切さを痛感していた。活動するときには必ず関わってくれている相手の存在を忘れてはならないことを、生徒たちは心に刻んだ。

しかし、生徒たちが作成した動画は、時間の関係で質的にはまだまだ改善の余地がある。

(4) 苗木観光PR作戦の実行

6月中旬、いよいよ2泊3日の篠島研修を迎えた。この研修では、山国育ちの生徒たちが普段味わえない海の体験活動とともに、これまで準備してきた三つの観光PR活動を行った。

① 民宿のご主人と女将さんを味方に

本校2年生は、2クラス41名である。四つの民宿にお世話になった。(A組男子・B組男子・A組女子・B組女子) 初日の夜、それぞれの民宿で、その活動を行った。

生徒のねらいは三つ。①郷土の五平餅を、心を込めて一緒につくりもてなす。②苗木城のポスターやパンフレットを民宿に置いてもらう了解を得る。③苗木の魅力を語り、民宿の人に苗木のファンになってもらう。

厨房をお借りして、持ち込んだお米や材料を使って、五平餅づくりが始まった。生徒たちは、民宿の方と楽しそうに会話しながら、食べてもらうに値する五平餅を完成させた。

練習してきたとは言うものの、場所が違うので、その場で判断しなければならないことも多いにもかかわらず、時には生徒同士で相談し、時にはリーダーの指示で臨機応変に活動した。目的をもって、また、意味を分かって活動する、たくましい生徒の姿があった。その後、全員で民宿の方と五平餅を囲み、食べながら、語り合う時間をもった。



生徒たちは、ポスターやパンフレットを使い、「苗木検定」で得た知識を駆使して、地元苗木の魅力を語るとともに、民宿に苗木のポスターを貼り、パンフレットを置いてもらうお願いをした。快く承知していただき、生徒たちは目的の一つを達成することができた。

私が、ある民宿の女将さんに「他の中学校より一つ余分な生徒の活動に付き合ってください、申し訳ありません」というと、「今日は仕事でやっているのではなくて、楽しいからやってい

るんです」と言っていた。いた。

うれしい言葉だった。思いが伝わる活動をした生徒たちを誇りに思った。



② ソーランライブで島の皆さんに

2日目の夕方、島のメインストリート前の浜で、練習を重ねてきた「苗木中ソーラン」を披露するライブを行った。なるべく多くの人に集まってもらえるよう、島に入った日から生徒たち全員で、出会う島民や観光客に呼びかけをしてきた。

生徒たちは、大きなかけ声を出しながら一心不乱に踊り、思いを込めたソーランに、たくさんの拍手をいただいた。予期せず、観客からアンコールの声がかかったので、それに応えてもう一度、さらに思いを込めたソーランを披露した。



集まっていた皆さんにお礼を言った後、生徒一人一人が観客の皆さんのところへ行き、自分たちでつくったパンフレットや観光課でいただいたパンフレットを配りながら、苗木の良さを語ってPR活動をした。

うれしいことがあった。「民宿の人がすごく勧めてくれたから見に来たよ」と言ってくれた方がいたことである。生徒たちの気持ちが伝わ

り、民宿の方を味方にしたいという願いが達成されたことが分かった瞬間だった。

このことは生徒に伝え、自分たちの願いがかなったことを喜び合った。



③ 大型観光施設で観光客の皆さんに

帰路上の愛知県知多半島に、多くの観光客が集まる大型の海鮮市場兼食堂がある。旅行社を通して活動の趣旨を説明したところ、活動の許可をもらうことができたので、3日目午前中、観光PR活動をさせていただいた。

まず、駐車場で苗木のPR活動を行った。生徒たちは、来店されたお客さんに声をかけ、趣旨を説明し、苗木観光に来てもらえるようパンフレットを配り、一生懸命説明をした。初対面の観光客に話しかけるのは、勇気がいることである。勇気を出して声をかけ、笑顔で会話をする生徒たちが頼もしかった。



次に、駐車場で合唱をする予定だったが、店長さんの計らいで、店内で合唱させてもらうことになった。店内には、多くの買い物客。「私たちは岐阜県の苗木中学校の2年生です。…」生徒の口上に続いて、「ハナミズキ」の合唱を始めた。

合唱を始めたたん、騒がしかった店内に静寂が生まれ、買い物客と店員さんが手を止め、足を止めて、聴き入った。中には涙する人もいた。



合唱の後、お客さんの注目を集めたところで、生徒代表が自分たちの活動の趣旨を語り、続けて「これから皆さんのところへ行って苗木のPRをします。私たちの話を聞いてください」と言って、生徒一人一人がお客さんの中へ入っていき、苗木観光PR活動を再開した。駐車場のときよりも、しっかり聴いていただけた印象だった。

観光施設という、聴く気がなければ聴いていただけない厳しい状況の中で、自分たちの話に耳を傾けさせた生徒たちの姿に力強さを感じた。

(5) 報告・感謝の会

生徒たちに、一連の地域貢献活動を振り返させ、自分たちがつけた力と次に向かう方向を確かめ合うとともに、活動に関わっていただいた皆さんに感謝を伝えるため、7月に保護者とお世話になった皆さんを招いて「篠島研修の報告と感謝の会」を行った。市役所観光課の方、広報広聴課の方、苗木公民館長さん、苗木地域まちづくり推進協議会の方、五平餅屋の女将さんなどに出席していただいた。

生徒たちは、プロジェクトチームごとに、活

動の様子や学んだことを報告するとともに、感謝の気持ちを伝えた。

生徒たちは学んだこととして、地域貢献を通して企画力が身についたこと、思いをもって人と交わることで新しい自分を発見したこと、社会において期限を守ることの意味が分かったこと等をあげていた。

苗木事務所長さんは、今回の地域貢献事業の様子を当初から見守ってくださり、発表会后、次のような手紙を寄せていただいた。

〈苗木事務所長さんからの手紙〉(抜粋)

…今回の「苗木に観光客を呼び込もう」プロジェクトは、“苗木の域学連携によるシティプロモーション”と言えると思います。…シティプロモーションの捉え方は様々ありますが、そこに住む地域住民の愛着度の形成もその一つです。その先には、地域の売り込みや知名度の向上と捉えることも可能です。苗木中の生徒さん達が取り組んだ苗木検定、観光パンフレット作り、五平餅でおもてなし、動画制作、民宿や浜、観光施設での苗木PRなどのプロジェクトはまさに苗木のシティプロモーションだと思います。こういった取り組みを通じて、苗木中の皆さんには苗木を誇りに思い、将来にわたって苗木のことを愛する人になってもらえるととても嬉しく思います。…

学校としては、生徒たちに地域に対する愛着をもたせたいと願って行った実践であるが、地域住民の愛着度を形成し、地域活性化を図るための、地域と行政の共同作業であるという価値づけをしていただいた。

4 おわりに

(1) 「地域貢献できる力と自信をつける」

① 企画力・表現力・交渉力

観光客を呼び込むために生徒たちが考えたアイデアを企画書にまとめ、市役所の各課や印刷屋さんなどと顔を突き合わせて説明したり交渉したりしたことは、文字どおり生徒の企画力・表現力・交渉力に変化を与えたと同時に、自信につながっていることが活動する生徒の表情か

ら読み取れた。

② どこまで通用するか本当のところを知る

生徒たちが働きかけようとしている大人の世界が、「中学生だからこの程度でも…」「中学生が頑張っているからこれくらいで…」等と甘い評価をしてくれるとしたら、生徒の本当の力にはならない。それに甘えず、本当に通用する部分があってこそ、将来地域に貢献できる本物の力になる。

そういう意味で、聴きたくなければ聴いてもらえない厳しい状況のお土産物屋で、合唱や自分たちの願いをしっかりと聴かせた事実、ある意味商売でやっている民宿の方に「楽しくて…」と言わせた事実は、生徒たちがちゃんと通用するものを準備できた結果であると言える。これは、生徒の大きな自信となっている。また、動画の期限を守ることができなかったことを、生徒たちは素直に反省し、教訓としていた。

一方、印刷屋さんは、生徒たちの思いに共感し、利益無しと思われる契約をしてくれた。とてもありがたいことであるが、通常のビジネスとして、生徒の相談に乗っていただき、仕事やお金の世界の厳しさを教えていただくように、しっかりお願いしておくべきだった。

(2) 「地域に対する愛着をもつ」

① 地域を愛する心は見ることができないが

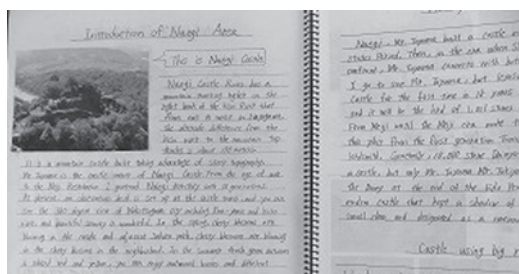
生徒の地域に対する愛着が高まったかどうかは、目には見えない。少なくとも、今回の事業を遂行するときの生徒の表情は意欲的であり、明るかった。変わっていく自分自身を感じていたのかもしれない。

夏休みの課題で英訳に取り組もうとしていた生徒が、次の作文と共に、故郷苗木を英語で紹介した英訳の大作を出品した。(抜粋)

新聞を英訳しようと考えたが、…せっかく苗木の勉強をしたし…もったいないと思い、苗木の紹介PRを英語でしようと考えました。…(英語で)苗木の観光PRをつくっていくと、もっと自分の

故郷の良さを伝えたくなくてきて、苗木だけでなく中津川市の観光PRもしようと思いました。…なかなか気に入ったPR(の英文)ができました。苗木や中津川市の良さをもっと…知ってもらいたいです。

今回の事業でねらった地域への愛着が、作品という具体物に込められた形で確認できた。



② 人交密度

今回の活動で、確かに生徒たちは地域の人、島の人、観光客等、多くの「人」との、たくさんの有意義な「交わり」を経験した。受け身でなく、目的をもって主体的に働きかけた。このような「人交」を通して、「人」を通して、生徒たちは地域を意識していった。

(3) 生徒を信頼し、生徒に任せてみる教育

今回の実践を通して、生徒たちを信頼して委ね、やらせてみると、素晴らしい力を発揮する生徒の姿がいくつも見られた。

これまでの教育を振り返ると、どうも教師が手を出しすぎ、準備をしすぎるが多かったのではないかと改めて感じている。

教師がやるべき主なことは、生徒が活動する土俵づくりと、生徒が主体的に求めてきたときに力を貸すこと。潜在能力をもっているのだから、任せて、やらせて、能力を引き出し、自信をもたせ、ノウハウを身につけさせてやらねばならない。このような指導の構えで地域貢献事業を行うことで、地域に貢献できる力と気持ちを育み、遠くない将来の「まちづくり人」を一人でも多く育てていきたい。